

桜井孝身という男

1966.9

清水 暎凰

桜井孝身は、私を先輩と呼ぶ。彼も私も「川向う」長門石の同郷だからである。私より五ツ年下なので、パッチやコマ遊びなど一緒にしたことはない。

彼の家はハトやヤギを飼育していたため、いつも筑後川原でヤギを追いまわしていたので、彼の近くによると動物臭い匂いがした。四男坊の彼は常によごれ、喧嘩坊主で開魂むきだしの少年であった。そんな雑草のような根性が今日のバイタリティとなっていることが私にはよく理解できる。一九六六年私がパリに滞在しているとき、アメリカのイミグレーションから追放されて、トランク一つぶら下げてやって来た。中の荷物は紺の着物と、すり切れた桐下駄、それに人間の極限でものぞき見るような前衛作品一枚だけであった。

傍若無人とは彼のためにあるような言葉で、花の都パリでも彼の容ぼうは異彩であった。ヒゲもじゃ男はパリではざらにいるが、彼はアメリカの GI 靴やバックスキンのソフトに、インディアン模様の絵を塗りたくり、汚れたタオルを腰にぶら下げている。

或る時は紺の着物に GI 靴をはきながら、ルーヴルのモナリザを眺め、サモトラケの女神を雄々として仰ぎ見ていた。これにいたっては、さすがのパリジャンも異質異様な人種として、目を見張っていたようで、案内役の私が恥ずかしかった。

しかしながら、私と彼が同宿していたホテルのパトロンが、「桜井はジャンターな男だ（親切で誠実）」とたった一ヶ月の滞在にもかかわらず見抜いていた。桜井孝身とはそんな男である。